

学長メッセージ



このところ、東外大オーケストラの充実ぶりが話題になっているだけに、春の定期演奏会への期待もまた大きい。今回は、チャイコフスキーの交響曲「悲愴」がメインだという。私にとっては、様々な想いのこもる曲だ。かつて私はくつき日の私>と題するエッセイにこう書いたことがある。

「高校一年の夏、父が事業に失敗し、わが家の土地、建物ばかりか書画骨董や家財まで一切を手放すことになったのだが、そのなかで私が是非残してほしかったのは電蓄だった。今日でいえば高級オーディオ・システムということになるのか。この電蓄は、恵まれた家庭であったとはいえ、何でも両親から買ってもらうのは良くないと思った私が、家業の手伝いということで松本から約二十キロ離れた北アルプス登山口の烏々宿まで日曜日のたびに自転車の荷台に薬を積んで一軒一軒訪問販売し、そのお金をためて買ったものである。吹雪の日などはアルプスおろしで耳がちぎれるほど寒く、雪の坂道で転んで薬が一面にばらまかれたこともあった。

こうして当時、町内でも誰も持っていなかった大きな電蓄を特別注文でしつらえ、音楽の好きなガールフレンドにも来てもらってチャイコフスキーの交響曲第六番「悲愴」を全曲暗記するほどに聴き入ったりして、とても嬉しかったものである。

この電蓄も人手に渡ることになり、両親は私が可哀そうだからと、私の寝ている間にそっと運び出すように手配を頼んだのだが、私は予感がして夜中に目が覚めてしまった。二階から電蓄を運び下ろす手伝いの人の後ろ姿が、今でもはっきりと脳裏に焼きついている。」「(『毎日新聞』一九八七年十一月・二六日)

私にとっては、このような思い出もある「悲愴」なので、どうか精一杯の演奏で聴衆を魅了してほしいものだ。

東京外国語大学学長 中嶋 嶺 雄 中嶋 嶺 雄

顧問あいさつ



穏やかな陽ざしが降りそそぐ府中の新キャンパス。外大オケもここで2001年を迎え、新たな、しかし、いささか多難なスタートを切ることになった。練習のための十分なスペースを持つことは、プロ、アマ問わず、すべてのオケにとつての宿願だが、学生諸君にはいまは我慢の時と心得てほしい。そんなハンディにもかかわらず、今回のメイン「悲愴」の仕上がりは上々だと聞く。そもそも「悲愴」の語源は「パトス(情熱)」。思えば、チャイコフスキーは伝記的にじつに興味の尽きない人物だった。同性愛がらみの自殺説ほか諸々。そして彼ほどこの「パトス」の信仰に身を捧げつくした人物も少ない。「悲愴」の音楽は、遠からぬ死の予感に囚えられた作曲家自身の「レクイエム」ではなく、むしろそれは、情熱と受難がないまぜになった「生きる」意志そのものの音楽なのである。

最後に、常任指揮者の橘直貴先生はじめ、トレーナーの先生方のいつもの温かいご配慮とご指導に心から感謝を申し述べたいと思う。

東京外国語大学管弦楽団顧問 亀山 郁 夫 亀山 郁 夫

団長あいさつ



本日はお忙しい中、東京外国語大学管弦楽団第61回定期演奏会にお起こし頂き、まことにありがとうございます。今回で私達執行部は引退となるわけですが、今日を迎えることができたのは多くの方の支えがあったからこそです。

昨年末から本楽団の活動拠点が府中キャンパスとなりました。OB/OGの方々による寄付金に頼らせて頂きながら、移転当初から引き続き多磨教会にお世話になり、また新たな練習場所として調布市知的障害者援護施設「なごみ」の地域交流スペースを利用させていただきました。このようなキャンパス付近での活動によって、移転早々地域の方達と交流する貴重な機会も得ることができました。

ご指導賜りました諸先生方をはじめ、この半年間を支えてくださった皆様はこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

東京外国語大学管弦楽団団長 岡 伊 陽 子



常任指揮者 橋 直 貴

札幌市出身。88年桐朋学園大学音学部のホルン専攻として入学。92年同大学卒業後、研究科に進み、94年より97年まで同大学の付属機関である指揮教室に在籍する。これまでに、指揮を岡部守弘、紙谷一衛、湯浅勇治、黒岩英臣の各氏に、ホルンを安原正幸氏、チェンバロを鍋島元子氏(故人)に師事する。また、大学在学中より、シエナ・ウィンドオーケストラに入団、95年4月まで同団のホルン奏者を務める。現在、各地のオーケストラ、合唱団の指揮者、及びトレーナーとして活動している。

21世紀を迎え、既に4ヶ月を過ぎようとしています。冬が去り、春も半ばを過ぎました。木々には緑が萌えて、花が咲く、我々の及ばぬところで季節は巡り地球は回る。このような当たり前のことが私には、もっと私達に見えざる何か大きな力の働きかけのように思えてなりません。人との出会いや別れも同様に、何か大きな力のようなものが人と人とを会わせて、また別れさせる。そんな運命の糸をたぐるものは一体何なのだろうか?と思う、この季節でもあります。

この1年間、外語大オーケストラにとっては、まさに試練の年であったように思います。キャンパス移転に伴って、自分たちの練習する会場がいちじるしく制限されてしまったのです。オーケストラの場合、みんなでひとつの音楽を創る、その前提として自分たちがそれぞれにちゃんと練習が出来ている、ということが不可欠となります。個人練習とは自分の音を聴くこと、それはとりも直さず自分との対話をする事です。それが合奏になった時、今度は音を介して他人との対話をする、というのがオーケストラの本質でありましょう。従ってそのプロセスがどこか一部でも欠けてしまうことで、メンバーそれぞれが自分自身に対し納得のいかないままに、合奏に臨まなくては行けない状況もあったように私には見受けられました。しかしそんな状況の中でも必死に、よい音楽を創ろうと食らいついてくる情熱、ひたむきさ、そして真面目さ。これは彼らのどこから湧きいづるものだろうと、時に圧倒される思いを感じました。彼らはオーケストラ活動を通じて、幾多の苦勞を乗り越えてきたという忍耐強さと知恵を、この1年間共に学んだのではないだろうか、とも思うのです。そして彼らのそんな「思い」は本日の演奏を通じて、今日この会場でいかに発揮されるに違いない、私はそう信じております。

新年度を迎えて、外語大オーケストラも新4回生はこの演奏会で執行部の座を次の学年に譲ることになります。新しい息吹が、新しい伝統を積み上げるべく、虎視眈々と待ち構えているように感じられます。今までこの一年、このオーケストラを支えるべく中心になりがんばってきた新4回生それぞれは、次に自分を生かすステージを模索していくに違いないでしょう。その対象がどんなことであっても勿論構わないと思います。しかし、美しいものを素直に美しいと感動できる今の感性をこれからも大切に育みながら、社会に出ていく準備期間に入って行ってほしいと思います。そして思慮深さと、大胆さを共に併せ持ちながら、自分を最大限に活かせる場をさらに追い求めて行ってほしいと願うのです。

新4回生はこの1年間本当に頑張って、外語大オーケストラをまとめてくれたと思います。そのことに心から感謝したいと思います。

引退し、卒業して外語大オーケストラを離れることになっても、どこかで楽器を演奏する、ということが続けてほしいと私は願います。何かひとつでも自分で楽器が演奏できることは、その人の生涯においての宝ではないか、と思います。そしてどこかで続けていればきっと、運命の神様が私達をどこかで再び引き合わせてくれることなのでしょう。その日を心待ちにしたいと思います。

本日はようこそおいで下さいました。最後までごゆっくりお聴き下さい。

2001年4月10日

橋 直 貴 (たちばななおたか)

東京外語大学管弦楽団 第61回定期演奏会

ヨハン・シュトラウスⅡ世 ワルツ「春の声」 作品410
Johann Strauss Ⅱ "Voices Of Spring",Waltz,Op.410

ロッシーニ 歌劇「セビリャの理髪師」 序曲
Gioacchino Rossini Opera "The Barber Of Saville",Overture

休 憩

チャイコフスキー 交響曲第6番 短調 作品74 「悲愴」
Peter Ilyich Tchaikovsky
Symphony No.6 in B minor,Op.74 "Pathétique"

I Adagio-Allegro non troppo
II Allegro con grazia
III Allegro molto vivace
IV Finale:adagio lamentoso

指揮 橘 直貴

2001年4月28日（土）14：00開演
ルネこだいら 大ホール

東京外国語大学管弦楽団 第61回 定期演奏会



Peter Ilyich Tchaikovsky

Symphony No.6 in B minor, Op.74 "Pathétique"

Gioacchino Rossini

Opera "The Barber Of Saville", Overture

Johann Strauss II

"Voices Of Spring", Waltz, Op.410

2001年4月28日(土) ルネこだいら 大ホール